

〔特集〕 子どもの学校生活から垣間見える家族

子どもの変質と新しい親密圏づくりの必要性

—子どもの社会力回復のために—

筑波大学教育学系

門 脇 厚 司

はじめに

編集担当者から私に与えられたテーマは「子どもの学校生活と家族」であった。恐らく、編集担当者が意図したのは、学校でいま起こっている様々な病理的な現象、例えば、いじめ、不登校、学級崩壊、対生徒暴力、対教師暴力、非行、あるいは学習意欲の減退、無気力、学力の低下などといった学校の病理現象が、わが国の現代の家庭での子どもの日々の生活ないし暮らしぶりとのどのように関係しているのかを、社会学者として、あるいは社会学的な視点から論じてほしいということであったのではないかと推測する。

そこで、本論では、そうした編集担当者の意図にできるだけ沿いつつも、視野をより広げ、近代産業社会における“家族”と“子ども”の位置付けの特異性と、近代公教育制度のもとで作られた“近代学校”の基本的な問題性に言及し、わが国の、今の社会に生まれそこで育つ子どもたちを取り巻く成育環境の問題性を問い質し、これから辿るべき方向について何がしかの提案をすることを意図したい。いずれも、大きなテーマであるが、敢えてそのことに言及するのは、子どもの問題を考える場合、こうした歴史的な広がりあるいは未来にわたる時間的なパースペクティブの中で考察を進めない限り、打開策は見えてこないと考えているからである。さらに言えば、近代産業社会の持続を前提とする限り、子どもたちの今後に明るい展望は開けてこないと考えているからである。日本家族看護学会の会員なら誰もが知っているはずのことであろうが、アメリカのギリガン女史が『もう一

つの声』を著し¹⁾、「ケア（配慮的行為）の倫理」の重要性とその復活を説いたのも、こうした社会的な文脈ないし歴史的パースペクティブのもとでであったことを想起してほしいと思う。

1. 近代産業社会における学校と家庭と子ども

1) 近代産業社会の特異性

18世紀半ばの産業革命以降現在に至る社会は、通常、近代産業社会と呼ばれている。長い長い人類の歴史からすれば、ほんの一瞬に過ぎない250年ないし高々300年ほどの時代であるが、この300年ほどの間に構築された社会が極めて特異な特徴をもった社会であることは一般にはあまり意識されていない。子と親を隔てる時間を「世代」と呼ぶが、その時間幅は約30年ほど。300年は10世代ということになる。子の世代からすれば、祖父や祖母の世代は60年前、曾祖父や曾祖母の時代はほぼ100年前ということになる。曾祖父(母)、祖父(母)、父(母)の時代に当たり前になったことが子の世代にとっても当たり前のことになるのはごく自然の成り行きである。こうして、今、近代産業社会の在り様は、そこで生き生活している人間にとって“ごく自然な当たり前なもの”となってしまうている。これを裏返して言えば、現代を生きる人間には、近代産業社会の特異性が特異なものとして意識されることはほとんど無くなっているということである。性能のいい機械を使いモノを作り、作られたモノを金を払って買って消費する、ある年齢に達したら学校に通い始め、学校を卒えたら仕事をし賃金をもらい、しかるべき年齢になったら

結婚し子どもを産み育てる、といった生き方をごく自然なこととしてしまっている。言うまでもなく、女性は、結婚したら外で仕事はせず、家の中で家事と育児に専念するというのも当たり前とされていることのひとつである。

なぜ、こうしたことが当たり前のことになったのか。端的に言えば、産業革命以降、このような社会の在り方が、近代産業社会を維持し発展させるために好都合な社会システムとして意図的に構築されたものであるにもかかわらず、時間の経過とともに人々がそれに馴染んできたからである。いかなる特異な社会でも、100年も200年も経てば、その特異性が特異なもの意識されなくなるということである。現代の教育問題や子どもの問題を考え解決策を見出そうとする時、まずこのことに気付かなければならないことを指摘しておきたい。

では、近代産業社会といわれる社会の特異性とはどんなことなのか。これまた、端的に言えば、「マニファクチャー（manufacture；製造＝モノづくり）」を社会の維持・発展の根幹とする社会であることである。では、マニファクチャー（製造）とは、具体的には、何をすることなのか。私の知る限り、その本質を分かりやすく明解かつ的確に説明したのは株式会社・ソニーの創業者の一人である盛田昭夫氏である。盛田氏の説明は次のようなものである。

「製造とは、資源（resources）や原材料（materials）に技術（technology）と創造性（creativity）を適用（apply）して実用品（real goods）を作り出す（create）営みである。こうして製造され付加価値をつけられた（value added result of manufacturing）結果としての製品（products）は、全ての人々に、便利（convenience）や楽しみ（enjoyment）を与え（provide）、人々の生活を豊かにする（enrich）ことになるのである。」²⁾

製造の何たるかが、また何ゆえ技術や創造性が重要であるかが明確に語られている。これ以上の解説は不要と思われるが、私なりに説明すれば、産業社会の骨格をなすマニファクチャリング（製造）とは、

「無から有を為す」営みとすることができる。あるいは、「不可能を可能ならしめる」ことによって多大な利益を得る営みということもできよう。もつと分かりやすく言えば、石を使って斧や鋤を作るとか、木から机や椅子を作る営み、あるいは綿花から糸を織ぎ、糸を織って布地を編み、それで衣服を作るといったことは太古のむかしからあった営みあるのに対し、近代産業社会のモノづくりは、石油から机を作り、クスリを作り、衣服を作る営みであるということである。要するに、作られたモノや製品からその原料になったものを想像することができないようなモノづくりをするのが近代の産業社会であるということである。さらにいえば、不可能を可能にすることで人々の暮らしを便利で豊かにするその程度が大きくなるほど企業家の利益が多くなるのが産業社会の産業社会たる所以である。

2) 近代公教育制度の本質と特性

不可能を可能にするテクノロジー（科学技術）を開発する営みは容易なことではない。また、そうした技術を開発できる人間が、社会の特定の階層にだけ、しかも自然に現れるわけではない。また、その子を産んだ親が子どもを“自然に”育てることでそうした才能を開花させるのは無理なこと。こうして、近代産業社会では、国民全員を対象にした教育の必要性が発案され（義務教育制度）、専門家（教える資格を与えられた教師）による計画的な教育を無償で施し、互いに競争させることで教育の効率をよくし、その過程で優れた才能の持ち主を探し出し、特別の教育（英才教育ないし高等教育）を施すことで才能を開花させ、不可能を可能にする営みを実現させることにしたのである。こうして体系化され整備された教育システムが近代公教育制度であった。国民全員に教育を受けることを義務づけ、計画的な教育を施すことで産業社会を発展させる人材を発掘し、不可能を可能にする技術の開発に当たらせるのが近代教育の究極のねらいであり、そうした意図的な教育を施す場として作られたのが近代学校というものであった³⁾。

先行世代たる親が後続世代たるわが子に生活の仕

方を伝授する営みが自然な教育であり学びの過程であるとすれば、近代教育制度のもとでの教育がかなり不自然なものであり、作為的なものであることは容易に理解できるはずである。

このような意図と作為のもとで作られた教育の制度が近代公教育制度であったとすれば、不可能を可能にする技術を考え開発できる能力を備えた人間がもつとも有能な人間として評価されるようになるのは必然であった。ノーベル賞が世界でもつとも権威ある賞と見做されるようになったのも、こうした社会的な文脈からすれば当然の成り行きといえる。そしてまた、産業社会の維持発展を左右する製造ないし生産なる営みに貢献する度合いによって人間への評価がなされることにもなった。それゆえに、女より男、子どもや老人より成人、障害者より健常者、病人より健康人、そして、怠け者より勤勉な人、無責任な人より責任感のある人、時間にルーズな人より時間を守る人、無計画な人より計画性のある人がより高く評価されることになるのもごく自然なことであった。

3) 近代産業社会における家族と子どもの位置

概要を説明するだけに止めようとした近代産業社会の特異性と近代公教育制度についての解説が意図に反して膨らんでしまったが、あと少し、関連して、近代産業社会における家族と子どもの位置づけについて言及しておくことにしたい。

近代産業社会の中核的な営為と場が製造ないし産業にあったことはいま述べてきた通りである。産業社会の中核的な営為が製造の場にあったため、そこで主役の座についたのは生産者あるいは労働者としての成人男性であった。このような産業社会を維持するためのシステムを次の世代に引継ぎつつ継続させるために構築されたのが“近代家族”という制度であった。社会の死命を制する生産の場でモノづくりに携わる成人男子(国家の存亡がかかる時には、銃を担いで戦場にも赴いた)がそこで休息することで生産に費やすエネルギーを再生産し、次の時代の生産を担う担い手としての子どもを産み育てる場とし

て、近代学校と平行して再構築されたのが近代家族なるものであった。こう説明し、近代産業社会の特異性を改めて想起すれば、近代家族の特徴として挙げられるいくつかの事項、例えば、「核家族が基本的な形態である。」「血縁者以外は家族に含めない。」「男は家の外で仕事に精出し、女は家の中で家事と育児に専念する。」「家族は互いに強い情愛によって結びついている。」「家族生活の中心は子どもである。」などが近代という時代に固有な特徴であるとされるのもすべて納得のいくことであろう⁴⁾。

こうして、近代の家族はそれまでさほど明確な境がなかった地域共同体から徐々に分離してゆくことになり、それにつれ、子どもたちは家の中に隔離されることになる。そして子どもたちは、強制(義務)教育の施行により学校という教育の場にも隔離され、次の時代の生産のよき担い手となるよう、また新しい技術を開発できる人間となるよう意図された教育の対象となっていく。こうして、子どもたちもまた地域の大人たちと交わり、共同の作業をすることが少なくなっていくのである。背丈の低い人間が、“大人に保護され教育される人間”と見做され、“子供”という新しいカテゴリーで括られ、そうしたカテゴリーに属する人間に相応しい扱いを受けるようになった近代という時代に特有な事態を、フランスの社会史家フィリップ・アリエスは「子供の誕生」と呼んだのであった⁵⁾。

2. 現代日本における子どもの変質

わが国において近代家族がそのプロトタイプ(原型)を現わし始めたのは1920年代の都市部、とりわけ東京においてであった。第一次世界大戦後に進んだ産業構造の変化によって新中間層なる新しい階層が形成されることになり、彼らは新しい階層に相応しい家庭生活と、新しい育児法と、新しい学校を求めることになった、というのがその社会的背景をなす⁶⁾。

しかし、その後の、第二次世界大戦に連なる戦争の

連続は、わが国における近代家族の芽生えを一気に吹き飛ばすことになった。第二次大戦の敗戦を挟んでほぼ30年を経て、近代家族が全国的な広がりを見せるようになったのは1960年代、わが国が高度経済成長への離陸を開始した頃からであった。第一次産業から第二次、第三次産業へと産業構造が大きく変化していくにつれ、都市部への大量の人口移動が起こる。都市部に移動した人々が、団地の集合住宅や郊外の一戸建てという住家で形作ったのが核家族であり、家電用品を完備したマイホームというかたちの近代家族であった⁷⁾。

こうして形成された近代家族の中で、父親たちは高度成長を支える優良な企業戦士となって夜昼なく働き、子どもたちは受験戦士となり受験戦争を勝ち抜くことを期待され勉強部屋にこもり、母親たちは専業主婦になることを理想とし、毎朝、夫とわが子を元気に会社と学校に送り出すことを日課とした。こうしてわが国に花開いた近代家族は、しばしの間、国民すべてに幸福をもたらし、その延長は明るい未来につながるかのように思われた。

しかし、好ましい状態はそう長くは続かなかった。事態は1970年の後半に入り暗転する。いじめ、校内暴力、不登校など学校病理といわれる現象が全国的に広がっていき、21世紀に入った今も、病理現象の変質はみられるものの、収束の兆しをみせてはいない。

こうした病理現象の根底には子どもたちの変質があるというのが私の見方である。どのような変質か。端的に言えば、「社会力の衰弱」ということになる⁸⁾。

社会力の衰弱とはどういうことか。様々な他者と協力しつつ社会の運営にかかわり、さらには、今ある社会をよりよい社会に作り変えていこうとする意欲と、それを実行していくに必要な知識や技能や資質などを持ち合わせていないということである。このような資質や能力をしっかりとものにしていくには、そのための下地が培われている必要がある。いわゆる社会力のおおもとといったものであるが、私はこれを、他者への関心であり、他者への愛着であり、

他者への信頼感であると考えている。では、何が他者への関心、愛着、信頼感を育むのか。象徴的相互行為論の創設者である。アメリカの社会心理学者G.H.ミードが構想した理論によれば、他者との相互行為によってである⁹⁾。私たちは、様々な“意味ある他者”と直接交わり行為の交換を重ねることによって、他者を取り込み、そのことによって他者への関心と愛着と信頼感を育てていくということになる。

しかるに、高度経済成長期以降のわが国の社会変化は、子どもが大人と相互行為する機会を著しく減少させ、代わって、テレビやテレビゲームやパソコンなどとの接触を著しく増大させることになった。その結果として起こった他者の取り込み不全が社会力を著しく衰弱させることになったのだといえる。他者に無関心な人間がマジョリティ（多数）になった時、社会が崩壊の危機に瀕するのは目に見えている。

3. 子どもの成育環境としての家庭生活の問題性

『「家族」と「幸福」の戦後史』という本の扉で、著者の三浦展氏はこう断定する。「家族や郊外というのは、高度経済成長期の日本においていわば意図的につくりだされてきた一種の『装置』である。その家族は自然なものでもないし、伝統的なものでもない。少なくとも、今われわれが普通に思い描く家族は、戦後の高度経済成長期につくられた、きわめて特殊なものである。…団地や家電や自動車が大量生産されただけでなく、家族そのものが大量生産されたのだ。戦後の核家族とは大量生産された家族なのだ。」¹⁰⁾。

私はこの見方に賛成する。公教育の場としての学校が不自然なものであったと同じように、第二次大戦後の日本に形成された近代家族もまた子どもが育つ場としては不自然なものであったのである。

経済の高度成長につれ伝統的な地域社会がほぼ崩壊してしまったその跡に残された学校が近代学校本来の機能を果たし始めたと同じ時期に、新しく大量に形成された近代家族もまた近代家族本来の機能を為すようになったといことである。では、日本に出現

した新しい家族形態とそこでの新しい家族生活が近代家族本来の機能を発揮することになったとはどういふことか。以下にそのポイントを整理しておこう。

まず一つは家族が地域社会から分離したということである。それ以前の家族は地域社会とともにあった。地域には家々が共同で行う作業が多々あったし、葬儀や婚礼なども地域全体で行うのが常であったし、少なくとも向こう三軒両隣りは相互に互助し合う関係にあった。ところが、戦後蘇生した家族は、互いに没干渉でいることが礼儀であるかのように、それぞれのマイホームにこもり、互いに他家から距離を置くことをよしとしてきた。家族ぐるみの付き合いはなく、子どもが地域の大人と交流する機会もなくなっていくた。

二つ目は一世帯当たりの人数の減少である。高度成長期以前の一世帯当たりの平均人数は恒常的に5人であった。それが高度成長期以降年々減少を続け、1995年にはついに三人を切るまでになっている。一つ屋根の下に住む人の人数が少なくなるということは、それだけ家族同士の付き合いが少なくなることを意味する。

三つ目は子どもが家族から隔離されたことである。高度成長期は高学歴社会化の時期でもあった。このため、どの家も子どもをよき受験戦士に仕立てるべく競って勉強部屋を用意してあげることになった。子どもが勉強のためそこで過ごす時間が多くなる分、家族との交わりがなくなるということになる。

四つ目は家庭生活のシンプル化(簡素化)とシングル化(偽単身化)の進行である。団地の集合住宅であれ郊外の一戸建てであれ、どの家にもテレビや洗濯機や冷蔵庫や電気炊飯器など便利な家電製品が各種揃えられ、それらは家事の簡素化を急速に進めると同時に一人暮らしを容易にすることにもなった。子どもが家事を手伝う機会はなく、家族が不在でも子どもが食事や時間つぶしに困ることはなくなったということである。それだけ家族同士の交流が失われたということである。

こうした家族構成と家族生活の変化は、ヒトの子

が人間として成長していく上で不可欠な他者との直接的な交流を放擲したに等しいといえる。現代つ子が他者への関心と愛着と信頼感を無くすことになったのはごく自然な成り行きであった。

4. 新しい親密圏としてのコミュニティづくりの必要性

伝統的な地域社会が崩壊し、学校がメリトクラシーの原則にもとづく競争主義を推し進めることによって個人間の分断を広げ、血縁と親愛の情によって結び付くとされた家族までもがその結び付きを弱めていくことによって、子どもたちは“自閉した個人”として自分の殻に引きこもるか、自分についての確かな認識と自分の居場所を見出せぬまま“浮遊する個人”として社会の中をさ迷い歩くという状況が進んでいる。定職に就くことなくアルバイトで世過ぎをするフリーターが約150万人、適齢期になっても結婚せず親元に寄生し続けるパラサイトシングルが推定1,000万人¹¹⁾、そして他の誰かとかかわることなくひたすら自室にこもり続ける引きこもりが推定100万人という。幼少時から大人との接触がないゆえに他者への関心をなくし、他者への関心がないゆえに他者と行為を交換することをせず、他者との相互行為がないゆえに他者を理解することができず、他者を理解しえないゆえに他者に共感することもない。こうして現代の若者や子どもたちは際限なく他者とのかかわりをなくし、社会から離脱していくことになる。社会力なき人間が多数になった時、社会が崩壊の危機に瀕することになるであろうことは先に指摘した通りである。

社会力なき人間が増える原因が、地域であれ学校であれ家庭であれ、子どもたちが他者とりわけ大人と直接的に交わり相互行為する機会と場を無くしていることにあるとすれば、問題の解決は、どのようにして子どもが大人と親しく交わり相互行為する場を作り出すことができるかにかかってくる。新しい親密圏をどこにどのように作り出せるかということで

ある。

子どもの生活空間が地域の他にないとするれば、地域社会を新しい親密圏に仕立てあげるほかないというのが私の考えである¹²⁾。その子を産んだ当事者である父親と母親だけにその子の養育と世話を押し付けるのではなく、その子が住む家の近くに住みお互いに知り合いである誰彼が入れ替わり立ち替わりし日常的にその子とかかわり相互行為を繰り返す空間、それが私のイメージする新しい親密圏である。特別に意図しなくても日常的に出会える範囲であれば望ましいが、地域的な広がり、新しい親密圏の場合、さほど考慮することはないと考えている。要は、互いに相手を自分の心の中に棲みつかせている人たちが地域に複数いて、日常的に何らかの交流がなされているとすれば、そこに親密圏があると言っているということである。近年、「地域の子は地域で育てる」という合い言葉を耳にすることが多くなっているが、そう考え日常的にそうすることを心掛け実行している人たちがいる地域は新しい親密圏を形成していると言うこともできよう。

アメリカの前大統領クリントン氏の夫人であるヒラリー上院議員は1996年に一冊の本を著している。書名は *It takes a village*. (邦訳名『村中みんなで』¹³⁾)。「子育ては村中みんなで」というアフリカの諺から考えた書名だという。この本の中でヒラリー女史がいう「村(village)」とは子どものいる家の回りの近隣だけではない。学校、教会、職場、コミュニティ、さらには文化、経済、社会、国家、世界を含む子どもを取り巻くすべての環境を意味してもいる。このようにヒラリー氏が「村」の内包を広げていくことによって読者に、そして社会を構成するすべての人々に呼び掛けているのは「私たち皆が子どもを保護し、育てていく機会と責任をもっている」ということであり、「私たちは、子どもに対して毎日の生活をよりよくしていくためにできることをしなければならず」、「親として、雇用者、労働者、消費者、ボランティア、市民として、自分たちにできることは何でもしていく」ことを求められているのだ、ということである。

ヒラリー氏はこの本の中で新しい親密圏という言葉を使っているが、目指しているのは子どもたちの周囲に新しい親密圏をつくることであるのは容易に理解できることである。

5. 試される「総合的な学習の時間」への対応

わが国の地域社会が新しい親密圏になりうるかどうかがいま試されようとしている。今年(2002年)の4月から、新しい学習指導要領にもとづく学校教育が小学校と中学校で始まるからである。新学習指導要領の最大のねらいは、ゆとり教育によって「生きる力」を育てようとしていることである。そして、文部科学省が、生きる力を育てるための必修の授業として新しく設けたのが「総合的な学習の時間」である。今年度から学校五日制が本格的に始まることもあるが、新学習指導要領では教科書を教える時間を約3割、教える教科の内容も約3割削減される。その代わり、小学校3年生以上の全学年の必修の授業として新しく設けられた「総合的な学習」の時間が年間100時間から110時間増えることになっている。この時間を週当たりになると、小学校の場合、週3時間、中学校では週4時間ほどになる。そして、この総合的な学習の時間でやるように指示されているのは、自分たちが考えたテーマについて、グループを組んで、学校の外で、体験的な学習をすることである。もちろん教科書はない。自分たちで考えた課題や問題について、児童生徒それぞれが、自分で考え、自分で学びながら、実現案を提案したり解決策を出したりするのがこの授業のねらいとされている。

私は生きる力の中核をなすのが社会力であると考えている¹⁴⁾。なぜなら、文部科学省の説明によれば、生きる力とは、①自分で課題を見つけ自分で課題への答えを出す能力であり、②他人を理解し、他人に共感し、他人と協力して何かをやり遂げることができることであり、③健康で体力があることだとしているからである。二つ目に上げられている他人を理解し、他人に共感し、他人と協力して事をなす力とは、

まさに、社会力そのものであるといえるからである。高度経済成長期以降のわが国に生まれ育った世代に共通に見られる変質が、他者への無関心に始まる他者の無理解であり、他者への共感のなさであり、他者不信であり、さらには人間不信、人間嫌いの性向の蔓延であると考えている私は、新しく設けられた「総合的な学習の時間」を、他者への関心を高め、他者への共感を募らせ、他者への信頼感を培い、そうすることで社会力ある人間に育てるための授業にしなければならないと考えている。総合的な学習は、子どもたちに社会力を育むための絶好の授業でありチャンスであると考えている。

しかし、毎週毎週3時間か4時間、すべてのクラスが総合的な学習を行い、この授業本来のねらいをまっとうするのは並大抵のことではない。毎週、学校の外で充実した学習を展開し成功に導くのは担任の教師の力だけでは到底無理なことである。この授業を成功させるためには、父母はじめ、地域の大人たちの協力が不可欠であると考えている。子どもたちを健康な身体と健全な精神をもった人間に育てるために、すなわち社会力に溢れた人間に育てるために、地域が新しい親密圏になりうるかどうか、地域の誰彼

が、入れ替わり立ち替わり子どもたちとかかわり話し、総合的な学習の時間を支援することができるかどうか、いま、問われ試されているといつてよい。

<註>

- 1) C.ギリガン著(岩男寿美子他訳)『もうひとつの声』川島書店, 1986年.
- 2) 盛田昭夫講演集『Speaking out』CBS/SONY, 1991年.
- 3) 桜井哲夫『近代の意味』日本放送出版協会, 1984年.
- 4) 落合恵美子『近代家族とフェミニズム』劉草書房, 1989年.
- 5) P.アリエス著(杉山光信他訳)『<子供>の誕生』みずず書房, 1980年.
- 6) 門脇厚司『日本教員社会史研究』亜紀書房, 1982年.
- 7) 坂本佳鶴恵『<家族>イメージの誕生』新曜社, 1997年.
- 8) 門脇厚司『子どもの社会力』岩波新書, 1999年.
- 9) G.H. ミード著(中野 収他訳)『精神・自我・社会』青木書店, 1973年.
- 10) 三浦 展『家族と幸福の戦後史』講談社新書, 1999年.
- 11) 山田昌弘『パラサイトシングル』ちくま新書, 1998年.
- 12) 三品(金井)淑子『新たな親密圏と女性の身体の居場所』(川本隆史編『新・哲学講義6』岩波書店, 1998年, 所収)
- 13) ヒラリー.R.クリントン著(繁多 進他訳)『村中みんなで』あすなろ書房, 1996年.
- 14) 門脇厚司『社会力が危ない!』学習研究社, 2001年.